
瑠璃蝶々

莉央沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃蝶々

【Nコード】

N5023G

【作者名】

莉央沙

【あらすじ】

・ 道路の真ん中で蝶を切っていた振袖姿の女の子。声をかけたら・

（前書き）

ホラーのつもりで書いたのに全然怖く無いんだぜっ！！

蝶々、蝶々

菜の葉にとまれ

菜の葉に飽いたら 桜にとまれ

桜の花の 花から花へ

とまれよ 遊べ 遊べよ とまれ

ついつい、さっきまで息子が歌っていた歌を口ずさむ。

幼稚園で昨日歌ったのだそうだ。

私は五歳の息子分軽くなつた自転車を幼稚園から家にむけ進めていた。

信号を渡りきつて右に曲がつた所でブレーキをかける。

そこはたいして広くはないがそれなりに車どつりのある道。その道の真ん中で不思議な物を見つけた。

女の子、だ。

女の子なら何所にでもいる。特に今日の前にいる様な小さい歳の子なら、学校に行く必要が無いのだから道で遊んでいても不思議ではない。

問題はその格好。

今日がお正月や七五三の時期なら問題は無いが今日はそんな行事はこれっぽちもない。

その子が着ているのは瑠璃色の振袖。不思議な銀の刺繍。帯は黒。髪は切りそろえて背に流している。

「ん？」

と女の子が振向く。

手には大きな裁ちバサミ。

足元には切り刻んだ蝶。まあ、あまり綺麗な模様では無いから蛾か

も知れない。

ふうとため息をつく。

そう言う物なのだ。

小さな子は、『命』をよく分からずに小さな生き物を玩具にしてしまふ事があるものなのだ。

だから、私は、今は、道の真ん中で遊ぶのは危ないと言う事だけ注意了。

「貴女も、切り刻まれた蝶の命より人間を心配するのね……」

その瞬間にふっと辺りが暗くなった。

視界に光が戻った。先程まで何をしていたのか、霏がかかった様になつて思い出せない。ただ今いる場所は分かる。何処かの庭だ。

きつちり整えられた芝生に背の低い花をつける木が沢山ある広い庭。羨ましい。

そんな庭で幼い兄妹が遊んでいる。もちろん知らない子どもだ。お兄ちゃんのほうは、大きな鋏を使って紙を切つて何かを作ろうとしている。よくよく見ればその鋏は裁ちバサミ。ああ、と苦笑する。

アレでは布が切れなくなつてしまう。自分の息子も裁ちバサミで工作して私に怒られた事があつた。

妹の方は、半径一メートル内に大量のおままごと道具を散らかして遊んでいた。プラスチックの食べ物や玩具の軽い鍋に入れ、鍋を振る。炒めているつもりなのだ。

ぴょんと、鍋から二セモノのりんごが飛び出す。ころころ転がるりんごを追つて庭のすみまで行く。

そこには花の咲きたい匂いのする小さい木があつた。

大きな蛹が居る。

ちょうど、羽化を始めた。

小さな女の子はまじまじとそれを眺める。

蛹から出てきたのは大きな瑠璃色の蝶。

振れた羽を伸ばし始める。

縁は濃い闇色。

光の加減によつて、銀の不思議な模様が輝く。

とても綺麗で、不思議な蝶々。

女の子は、まだ伸びきらない羽をそつと掴む。

たつたと兄のもとに駆け寄つて見せる。

「おにちゃんみてえ。いいでしょ」

兄は蝶を見て、そして掴んだ。

「これ、兄ちゃんにちょうだい」

やだあ、と妹が泣き出す。

「あたしがみつけたのお」

「いいじゃんケチ。これ虫なんだよ」

兄妹は喧嘩を始めた。

どちらかが勝つ前に、蝶の羽が破けた。

妹は更に大きな声で泣き家に駆け込んで行く。

「おかあさんおにいちゃん、があゝ・・・」

すぐに女の声が家の中から聞えてきた。

「モトキ！自分より小さい子泣かしちゃダメでしょ！？」

兄は地面に落ちた片方の羽しか持たない蝶を裁ちバサミで小さく切

つて庭のすみに投げる。

「モトキ！」

もう一回呼ばれて慌てて駆けてく。

「僕なんにもしてないもんっ！」

私はそれを目で追つてから、蝶の方を向く。

そこには、どこかで見たことの有る、瑠璃の振袖を来た女の子が膝をついて泣いていた。

「酷い、酷い、酷い酷い酷いつ！！絶対に、許さない」

ふつと気づくと、私は自転車を支えたままボケツと道路につっ立っていた。

さっきのは夢だったのだろうか？

考えていると、ガシャンと音を立てて自転車が倒れる。何故倒れたのだろう？不思議に思っただけで自転車を起そうとするが起せない。

腕がついていないから。

肘先から無くなった腕は自転車のハンドルを握ったまま、断面を晒していた。次に私も地面に転がる。足も切られている。

一拍置いてか赤い霧が噴出す。自分の血が自分にベシャベシャとかかる。

あまりの事に声が出ない。

「人間って、本当に酷いのよ」

後ろを振向けば、血塗れた裁ちバサミを握った瑠璃の振袖の女の子が立って居る。

幼い子どもの瞳は、恨みや憎悪そんなものがいっぱいに浮かんでいて……

「酷いよね、酷いよね」

ハサミを広げて私の首に添える。
動く事も声を出す事も出来ない。ただただ、綺麗すぎる女の子の顔を見返す。

ちよんつと、ハサミの刃が閉じて私の首は転がる。

まずいまずい、とボクは慌てて家を飛び出した。完璧遅刻だ。近道しようと思えば曲がらない道を曲がる。そこで目に入ってきたのは倒れた自転車と醜い模様のばらばらの蝶々。そしてそこらしゅうに飛び散った汚い泥水。

急いでいるが、この道を通るのはきが引けて回れ右をして走り出す。視界の隅にヒラヒラとした青の綺麗なモノが映った気がした。

わたしはとつてもとつても悲しいの。

一度も飛ぶことをしないまま、私の羽は奪われてしまって、小さいからと簡単に潰されてしまって、そして、とつても恨めしいの。

蝶々、蝶々

恨みを晴らす

どんなに切つても 恨みは尽きず・・・・・・・・

「本当に、許さないから」

(後書き)

ああ・・・。

お粗末様でしたっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5023g/>

瑠璃蝶々

2010年10月11日21時57分発行